

北海道の春は遅く、だが一気に来ると言われる。確かに、雪解けの茶色の世界がみるみる淡い緑色でおおわれ、やがてその間に鮮やかな黄や白や赤い色が混じり始める五月は北国に春が来たと言うふうにふさわしい。

ただ、ここで暮らしていると春はもつと早くからやってきていると思うことがある。例えばフキノトウだ。まだ雪がうっすら残っているところにグツと顔を出す。あの独特の味と香りも合わせて春の訪れを感じさせる。ところが、よく観察しているとあのフキノトウの姿はすでに晩秋に見られるのだ。その時にはすでにフキノトウの形になっていて、そのあと深い深い雪の下に埋もれながらじいっと雪解けを待っているのだ。そういえば木々も冬芽のかたちで春を待っている。冬芽は春になって枝や葉や花になるものが硬い鱗のような殻のなかにギュッとつまっている。その状態で厳しい冬の間じっと時が来るのを待っているのだ。空気中の水分が氷の結晶となって冬芽にまとわりついているのを目にすると早く暖かい日差しが来るように応援したくなる。

冬の間の太陽は、どんよりとした雲に覆われることが多いこともあるが、夏のあの生気は消え失せ、弱々しく感じられる。そんな冬の太陽に力が戻って来たと感じるのは二月である。これはまったく感覚的なものだが、妻もそういう。そもそも、北国のここでは十二月、一月と朝七時になっても陽は登って来ないし、夕方四時半を待たずに陽は沈んでしまう。それが、二月になると日の出は六時台になり、二月の半ばには日の入りも五時過ぎになる。そこから日照時間もぐんぐん長くなる。太陽が南に来た時の角度も冬至の頃は二十四度台だったのが二月になると三十度まで高くなる。この南中の時の太陽高度は冬至前後の角度の上昇は鈍く、二月前後頃からぐんぐん上昇し始める。そんなこともあって二月になると太陽が戻って来たという感覚になるのかもしれない。それに気のせいか、その頃になると鳥たちの鳴き声も力強くなる。長い冬から抜けて春が始まったと感じるのは私たちも鳥たちも二月からということだ。それだから二月の湿った雪の除雪も耐えられるのかもしれない。

我が家のメインの屋根は非常に緩い勾配にしてあるので、冬の間、ほぼ屋根に雪は積もったままになる。それが三月の半ばにもなると厚く積もった屋根の雪も徐々に落ち始め、太陽の熱も加わりどんどん少なくなってくる。三月下旬になると、敷地の雪原にところどころ窪みが見られるようになる。最も早く見られるのは南向きの斜面の木の根元だ。太陽の光を浴びた木の体温が木の周りの雪を溶かすのだ。それから平坦なところにも大きな窪みが現れる。池や川の場合だ。冬の間、池の表面は氷に覆われ、その上に厚く雪が積もっているのだが、深く掘ったところは下に水が残っている。そこに、徐々に解けた雪が水となつて川に集まり流れをつくってくる。そうなると表面を覆っていた氷も解け、その上の雪も他より早いスピードで解けてくるのだ。この頃になると、やることも除雪から、雪解け前にやっておかなければならない作業が変わってくる。冬の間には雪で折れてしまった枝の整理だ。



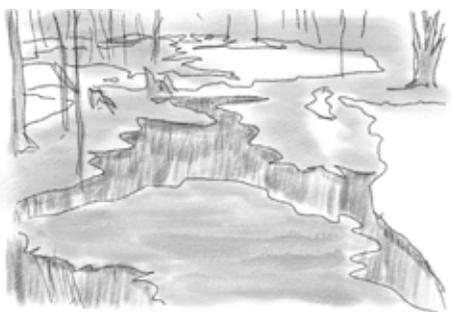
これまでは雪で折れてしまった枝はそのままにしておいて、雪が解けてから気が向いたら拾って集めて焚き付けにしていた。それで問題にならない量だったのだが、昨年の大雪でかなり太い枝も裂けるように折れてしまい、量も相当になつてしまった。これを雪解けを待つてから運んで集めるのは枯れ草に枝が絡んだり、雪解け水でぬかるんだ土に足を取られて大変になる。やるとしたらまだ雪のあるうちにするのが良いのだ。

雪の上を歩くのにはスノーシューを使う。ここに移り住むきつかけを作つてくれた隣人から、竹山移住記念にプレゼントしてくれたスノーシューであるが、これまで冬の野山の散歩の道具と思ひ込んで出番があまりなかったのだが、この時を待つていたように冬の外作業に必須の道具だということを再認識させてくれた。歩き慣れないと雪に先端を取られたりして不自由なのだが、慣れてくると補助ストックなしで移動できるようになつてきた。両手が自由になると折れてしまった枝を鋸で切ることできるし、両手に抱えて運ぶこともできる。行動範囲も広くなつた。普段は根曲がり竹が行く手を阻んでいたところも雪の上だと自由に行き来できる。これまで行つたことのなかつた敷地の端まで行けるのはこの時期がベストだ。

雪の重みで折れた枝は、太いのは二十センチメートルほどもあり、大小集めてくるとちよつとしたポリウムになつてしまった。とりあえず、家の近くに積み上げたのだが、雪解けになるとそこは、川であつたりレイズドベットの畑だつたりするのでそのまま放置するわけにはいかない。まずは用途別に分類するところからだ。太い枝は薪にする。比較的長さのある小枝は束ねて土留めなどに使える「粗朶(そだ)」にする。それ以外の小枝は細かく砕いて園路に敷く材料にする。この分類作業は結構時間がかかるのだが、これをしておかないと最後の作業が終わるまで雑然とした状態のままになつてしまう。外作業は結構何日もかかるものが多いのだが、その一日一日で一定の始末がつくように作業をして行くのが重要だと思つている。

ようやく枝の整理が終わつたのは、久しぶりの土が雪の下から出て来るころになつた。そうなつたら、薪にするとして集めておいた枝をさらに、チェーンソーで切るもの、鋸で切るもの、鉋で切るものに分けて、それぞれの作業をしていかなければならない。それも目処がつく頃には別の作業が待つている。フキノトウなどの山菜の収穫だ。フキノトウにしる根曲がり竹の小さなタケノコにしても、ちよつと目を離すと大きくなりすぎてしまう。敷地のあちこち目星をつけているところを毎朝巡回するのだ。

敷地の中の雪は最後ひとつの小さな塊になつてやがて完全に消える。それはだいたい四月の上、中旬になる。ここで暮らし始めてからの完全雪解けの日で一番早かつたのが四月七日だ。そして一番遅かつたのが四月の十九日。大雪だつた今年だ。それに合わせるように自動車の冬用タイヤを夏用に変えるタイヤ交換がやってくる。



その頃になると、鳥たちの声で季節が変わったことを実感させられる。代表的なのはウグイスの初鳴きだ。これが毎年だいたい同じに日に鳴き始めるのが不思議だ。例えば二〇一九年は四月十三日、翌二十年は四月十六日、二十二年は四月十五日という具合だ。逆に四月二十三日まで鳴かなかった二十三年は、何か自然界に異変があったのかと心配になってしまいうくらいだ。同じ頃、その声を聞くとホッとするのがオオジシギだ。前にも書いたようにオオジシギは遠くオーストラリアからノーストップで渡ってくる鳥で、無事に渡りを終えることができなかったのも少なく無いと言う。オオジシギもほぼ同じ頃にやってくる。最も早かったのが二〇一九年の四月十五日で、最も遅かったのが二〇一八年の四月二十六日だった。オオジシギは鳴き声もそうだが、独特の金属的な翼の風切り音を聞くと、「長旅お疲れ様でした。ここでゆつくりしていいね。」と労いたくなる。

そうなる。エゾエンゴサクの黄色い花や、コブシの白い花、そしてエゾヤマザクラなどの春を代表する花々の出番になる。まちなかにいた時は、それらの花々を目にすると春が来たと感じていたが、ここ竹山にいと春はもつと早くからスタートしていて、その間は、人も生き物もまた一年を過ごすための準備をしっかりとするための時間として大切にしなければならぬと感じる。

準備といえば、この時期大切なのはスズメバチトラップの設置だ。この頃になるとスズメバチの女王が目覚め、巣をつくり始めるのだ。一人で巣をつくりそこに卵を産み育て成虫になると、力を合わせて巣を大きくしどんどん卵を産み育てる。それを繰り返し返して両手で抱えるほどの大きな巣ができあがる。スズメバチはミツバチなどを襲い幼虫のためのタンパク質を集めるようだ。人間もタンパク質であるが、食料として襲うことはない。ただ、間違つて巣に近づいたりスズメバチにとって脅威になる存在と見なされたら刺される。ご近所のOさんも草刈りなど畑仕事をしていて刺されアナフィラキシー症状が出て救急車のお世話になったと言う。ちょうど、ここで定住を決めた年の春に家の軒裏に小さな徳利型の巣をつくられてしまった。まだ、女王バチが一人で巣作りしている段階だったので、すぐに刺される事態にはならないと思われたが、そのままにしていると巨大なスズメバチ集団を形成してしまうので、駆除することにした。駆除するにはホームセンターで売られているスズメバチのイラストが大きく描かれた専用の強力殺虫剤を使うのだが、相手も必死だろうから逆襲を恐れて駆除業者をお願いした。

業者に頼むとそれなりのお金がかかるので、それ以降、Mさんに教えてもらったハチトラップを五、六ヶ所設置することにしていく。大型のペットボトルにハチが入る穴を開けて中に特別なカケルを入れるのだ。レシピは極甘口の日本酒二に対して酢と砂糖を各一混ぜる。それをペットボトルに深さ七、ハチセンチメートル程度入れて、怪しそうなところに吊るすだけ。ただ、自分たちがよく通るところは避けないと呼び寄せるだけになる。

